

## 片手動作ブラジャーの試作と検討

貝淵正人<sup>1)</sup>・遠山郁子<sup>2)</sup>・小堀恵美<sup>2)</sup>・滝澤幾子<sup>3)</sup>本多成子<sup>3)</sup>・田村匡子<sup>4)</sup>

1) 新潟医療福祉大学

2) 新潟リハビリテーション病院

3) 東新潟第二病院

4) (株) ワコール

## 【はじめに】

2000 年より施行された介護保険導入に伴い、「機能的に診るリハビリテーション」から「生活を診るリハビリテーション」への変容が叫ばれている昨今、日常生活活動を重要視してきた作業療法士が果たすべき役割は、より一層重要かつ必需とされてきている。

しかし、作業療法士の活躍すべき分野が拡大するに伴い立ち遅れている分野や着手されていない分野が目立つようになった。そのひとつに、女性のブラジャー装着の分野が挙げられる。(株) ワコールによると、ブラジャーを装着するのが当たり前になってきたのが 1940 年以降に生まれた世代ということである。これは、これからの女性片麻痺者は以前と比較して更衣に関する ADL の難易度が高くなることを意味する。また、同時にそれは、ニーズが高いということにもなるであろう。

さらに、女性の社会進出や障害者の社会復帰が活発になってきており、女性の「社会的身だしなみ」としてブラジャー装着は基本的なことという認識となった。しかし、ブラジャーをつける習慣がなかった障害者も多く認められたため、作業療法でも、この分野に関しての研究はほとんどなく、あまり重要視されていなかったものと思われる。

そこで、今回、片麻痺者など片手動作でおこなう場合には、どのようなブラジャーが装着しやすいのか検討した。

## 【対象者】

健康女性 13 名 (平均年齢 20.0 ± 3.6 歳)。利き手は全員右利きであった。また、普段しているブラジャーは、全員が後ろホック (後ろ環) のものであった。ブラジャー使用頻度は平均 6.8 日 / 週であった。

## 【方法】

企業の協力により、普通のブラジャー (普通ホック) と、それと同種のブラジャーでホック (後ろ環) のオス環とメス環を逆にとりつけたブラジャー (以下、逆ホック) の 2 種類を作成した。対象者は、普段のサイズのブ

ラジャーを各々ひとつずつ選択する。対象者は、一側上肢にフレクサーヒンジスプリントを装着し肘固定 90 度屈曲にて固定した (以下、片麻痺様)。片手でブラジャーを装着する方法は統一し、2 度練習した後、右片麻痺様で 2 種類のブラ装着、左片麻痺様にて 2 種類のブラ装着で合計 4 回実験をおこなった。尚、実験の順番は乱数表によりランダムとした。

結果の群間比較には Wilcoxon の符号付順位検定を用いた。

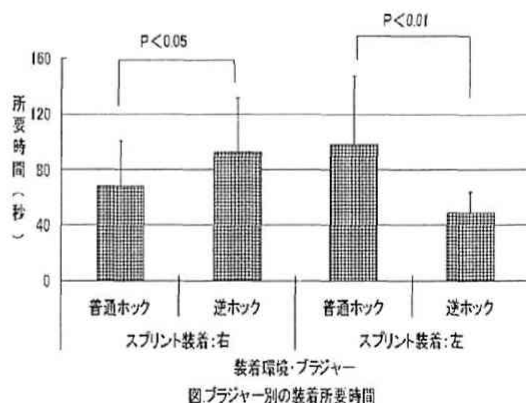
## 【結果】

各環境での、ブラジャー装着に要した時間を図に示す。右片麻痺様では、普通のホックの方が有意にはやく装着でき、左片麻痺様では、逆ホックの方が有意にはやく装着することができた。

## 【考察】

今回の結果より、現在流通しているブラジャーのホック (後ろ環) では、片手で後ろのホック (後ろ環) を止める際に、右片麻痺者にとって有利であるが、左片麻痺者にとって装着に時間がかかるということが明らかとなった。

我々、作業療法士が、女性片麻痺者の ADL 訓練をおこなう際に、右片麻痺者にとっては、現在のブラジャーでの装着訓練を進めればよい。しかし、左片麻痺者の ADL 訓練をおこなう際には、ブラジャーのホックのオス環とメス環の位置を左右逆につける工夫が、対象者の ADL 自立の手助けになるのではないかと考える。特に、年令の若い対象者の社会参加のためには「自分でブラジャーを装着する」ことは必須であると考え。ゆえに、この作業を簡便にするには「ホックを逆につける」ことも有効なのではないかと考える。



Key Words : 片手動作・更衣動作・着衣動作